

編集委員会

小川清史著『合憲自衛隊 新自衛隊法―九条のままでも戦える組織に』

ワニブックス

著者の小川清史氏は、陸自82期、米陸軍歩兵学校及び指揮幕僚大学留学、自衛隊東京地方協力本部長、陸上幕僚監部装備部長、第6師団長、陸上自衛隊幹部学校長、西部方面総監を歴任。現在、一般社団法人救国シンクタンク客員研究員、全国防衛協会連合会常任理事。著書に『近代戦を決するマルチドメイン作戦』（国書刊行会）、『どんな逆境でも、最高のパフォーマンスを発揮する心を「道具化」する技術』（ワニブックス）など多数。

小川清史氏は、他国の軍隊が国際法による制限を除き原則無制限に行動できるのに対して、自衛隊は憲法以前の自衛隊法によって行動を制限されており、いざというときに国土・国民を全力で守ることができる仕組みを平時のうちに整えておく必要があると説きつつ、自衛隊の軍事組織化について見解を述べています。自衛隊のあり方をめぐる議論は、

国の安全保障と民主主義の根幹に関わる重要なテーマであり、立場の違いを超えて冷静かつ建設的に議論を進めていくべきと主張しています。

併せて議論の伏線となる法律家による警察と軍隊との違い及び国際法と国内法の違い、並びに憲政史家による日本国憲法の解釈の変遷について触れており、一般教養図書的一面も兼ね備えています。

目次

- 第一章 なぜ自衛隊を軍隊にすべきか
- 第二章 自衛隊が「警察」では国益を損なう
- 第三章 自衛隊を軍隊にするには
- 第四章 「新自衛隊」に必要なもの
- 第五章 自衛権の行使を担う自衛隊の行動を支える法制度の必要性と具体化(横山賢司)
- 第六章 自衛隊が軍隊になるための憲法解釈(倉山満)



ワニブックス 本体1700円+税

門田隆将著『大統領に告ぐ 硫黄島からルーズベルトに与ふる書』

産経新聞出版

著者の門田隆将氏は、新潮社『週刊新潮』編集部記者、デスク、次長、副部長を経て独立。『この命、義に捧ぐ―台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡』（集英社）で第19回山本七平賞受賞。主な著書に『死の淵を見た男―吉田昌郎と福島第一原発』（角川文庫）『太平洋戦争最後の証言（第一部〜第三部）』（なぜ君は絶望と闘えたのか―本村洋の3300日）（新潮文庫）など多数。

本書は、昭和20年3月、玉砕する硫黄島で日本の海軍司令官 市丸利之助少将がしたためた一通の手紙を描いたノンフィクションです。

「日本海軍市丸海軍少将書ラ」フランクリンルーズベルト」君ニ致す。我今、我が戦ヒラ終ルニ当リ、一言、貴下ニ告グル所アラントス」

こう始まる手紙は、日本の立場、大東亜共栄圏の意味、天皇の平和を願う思い、アングロ・サクソンの欺瞞、西洋諸国による人種差別、スターリン率いるソ連との協調の危うさ等、あらゆる角度からルーズベルト

大統領の目を開かせようとするもので、日本人がこの80年で失ったもの、

これからの日本人に必要なものは何かを伝えています。

手紙を書いた市丸少将、命をかけてこれを翻訳したハワイ生まれの日系二世、その英文と和文を腹に巻いて突撃し死して米軍に届けた通信参謀らの意思と行動の理由、そして市丸少将による最後の訓示「百年後の日本民族のために殉ずることを切望する」の意味が明らかになります。

目次

- 第一章 始まった史上最大の激戦
- 第二章 硫黄島「海軍司令部壕」
- 第三章 ルーズベルトに与ふる書
- 第四章 命をかけた翻訳
- 第五章 壮烈な最期
- 第六章 米紙が報じた「大統領への手紙」他



産経新聞出版 本体1400円+税

ご関心のある方は、メール又は電話でご連絡ください。

henshu@rikushukaikosha.or.jp (電話)03-6380-0623